初対面会話におけるナラティブの評価：聞き手の評価の日・英語対照研究

岩　田　祐　子

1．はじめに

我々が自分の過去の出来事を知人や友人に語ることは往々にしてあるだろう。ナラティブで自分の体験を語るとき、起こった出来事の客観的な内容だけをありのままに報告しているわけではなく、「話」には特定の視点（point of view）が含まれている。語り手は、聞き手に自分の体験を聞いてほしいだけでなく、体験に関する自分の意見や感想を受け入れてほしいと思っていることも多いだろう。

一方聞き手も話し手の「話」を聞き、その話に対し、自分の意見を踏まえた評価を行うこともある。会話の中でナラティブが語られるとき、語り手だけでなく、聞き手の存在が重要になる。会話は話し手だけで作るものではなく、聞き手の役割が大きいと言われる。たとえばデュランティは、the audience as co-authorという表現を使って、会話において聞き手は話し手と共に会話を作るのだと主張した（Duranti 1986）。会話の中のナラティブも話し手が一方的に語るのではなく、話し手と聞き手が協同構築している。たとえ聞き手があいづちや笑いでしか会話に参加していなくても、あいづちや笑いが語りをもっと進めてよいという合図になりナラティブを促しているという意味で、話し手と聞き手でナラティブを協同構築している。まして聞き手がナラティブの途中でコメントを言ったりすれば、話し手のナラティブそのものの修正が行われるかもしれない。話し手がナラティブを語るとき、常にナラティブの協同構築の過程で聞き手からの評価を受けているのである。

本稿では、日本語母語話者による日本語会話と英語母語話者による英語会話それぞれの中で現れるナラティブを、聞き手が語りをどのような手段でどう評価しているのか、それが語りにどう影響を与えているのかという視点で分析し、対照比較する。その上で、会話中のナラティブに対する聞き手の評価における日・英語の特徴を考察する。

2．ナラティブとは

会話の中に現れる体験談ナラティブを研究したラボフとワレツキーによれば、体験談ナラティブには二つの機能があると言う。一つは、体験の内容を表す「指示的機能（referential function）」であり、もう一つは、語り手の体験に対する感想や態度を表す「評価的機能（evaluative function）」である（Labov & Waletzky 1967）。松木は、体験談ナラティブについて、「我々のコミュニケーションは実にダイナミックな意味形成のプロセスであり、直接的に表現される文字通りの意味情報だけでなく、間接的に表現され、コミュニケーションが起きている状況の様々な要因と関係づけられることによって初めて解釈可能となるような社会的意味が多くある」と述べている（松木 2008：104）。

調査インタビューの中で現れるナラティブにつ

いて研究したラボフとワレツキーは、ナラティブのことを「もともとの体験の時間的連続に対応するようにナラティブ要素を構築するテクニック」（“a technique of constructing narrative units that match the temporal sequence of that experience”）と定義した（Labov & Waletzky 1967：13）。ラボフらは、語り手は自らの体験を次のような六つの構成要素に基づいて語っていると主張した。それらは、1. 要旨（abstract）、2. 導入（orientation）、3. 展開（complication）、4. 評価（evaluation）、5. 解決（resolution）、6. 終結（coda）である。4番目の「評価」とは、ナラティブ全体が存在する理由であり、なぜそのナラティブが語られているのかを示す部分である。

サックスは、ナラティブをpreface sequence, telling sequence, response sequenceの三つの部分に分けた。preface sequenceで、語り手はナラティブの前置きを行ない、storytelling sequenceで語りを行う。そして語りが終わった時に、response sequenceにおいて、聞き手は語られたナラティブが語られる価値があったと評価を行うのである（Sacks 1974）。

しかし、会話のやり取りの中で現れるナラティブは、日常会話のやり取りの中で相互作用的に語られるので、ラボフたちのモデルのような構成を常に取るわけではないことはその後の研究者たちによって指摘されている。たとえば、オックス & キャップスは、everyday narrativeやliving narrativeという用語を用いてナラティブが日常会話の中で語られることを述べている。Living narrativeは、日常の社会的やり取りに焦点を当て、その中で参加者たちは、磨き上げられたナラティブのパフォーマンスを行うというよりは、人生の出来事の説明を行うのだと述べている。またナラティブは、会話の中でターンごとに形作られ、また再度形作られていくとも述べている（Ochs & Capps 2001）。

本論で扱うナラティブは、初対面会話の中で行われたナラティブであり、ラボフとワレツキーやサックスの提唱したナラティブの形式を踏襲していないものが多い。オックス & キャップスが提唱した「会話の中で参加者がターンごとに形作り、また再度形作るナラティブ」を本稿でのナラティブの定義とする。

3. 聞き手によるナラティブの評価

グッドウィンは、聞き手の反応が話し手による語りの語られ方を形作ると述べている（Goodwin 1986）。会話において話し手が語る語りに、聞き手がどのように貢献するのかの方法としては、主に次の5つが考えられる。第一に、聞き手が話し手の誰かを語りに誘うことである（Lerner 1992）。第二に、話し手の語りを聞き、時々コメントを言うことである。コメントの中には、先取り発話と呼ばれるものがある。先取り発話とは、田中（1998：17）によれば、「相手の発話が完全に終わらないうちにその発話内容を予測し、それに関わりのある何らかの言語表出を行うという行為」である。第三に、笑いや共感を示すことで、もしくは積極的なあいづちによって、話し手の語りへの感謝を示すことである（Jefferson 1979；Mandelbaum 1987；Branner 2005；Georgakopoulou 1998）。第四に、別の評価を示すことで語られた話の意味を交渉することである。たとえば、話し手のナラティブに示されている視点とは別の視点を提示することである（Goodwin 1984；Ochs & Capps 2001）。第五に 聞き手が話し手になり、より積極的な役割を果たすことである。この場合は、すなわち話し手の語りに詳細を加えたり、一部を修正したりするのである（Goodwin 1979；Lerner 1992；Madelbaum 1987；Manzoni 2005）。また話し手とデュエットするかのように話を共に語ることである（Mulbohand 1996）。第五の役割としての聞き手が関連した語りをするということは、聞き手が話し手になって話し手の語りに関連したstoryを語るということで、サックス（1974）が提唱し

たsecond storyとも呼ばれるものである。また第五の方法の中には、タネンが提唱する聞き手が「声」の引用をすることで疑似対話（constructed dialogue）を構築し、話し手と語りを協同構築することが挙げられる（Tannen 1989）。

このように聞き手は協同語り手として話し手のナラティブに参加する。その過程で、話し手が語るナラティブに対する自分の感想や評価を表現することがある。サックス（1973）によれば、ナラティブが終わった段階のresponse sequenceにおいて、聞き手はナラティブの結末や視点についての適切な評価を行う。ナラティブが語られたことは適切であったと述べるのである。また語り手のナラティブが終わった段階で、聞き手が次の話し手となって語るsecond storyは、話し手が語ったfirst storyの特定の視点（the point of the first story）への理解を示すために行われる（De Fina & Georgakopoulou 2012）。First storyへの同調を示すために語られ、聞き手による話し手のナラティブ（first story）への評価を示す手段である。

ナラティブが語られている途中で、聞き手がナラティブに対する評価を表すこともある。語り手がナラティブを語るとき、引用ストラテジーを使って自分自身や他人の「声」の再現を行うことがある。このような「声」は、当時のやり取りを忠実に再現しているわけではなく、ここには物語性や虚構性があり、語り手による構築された対話である。引用によって過去の出来事をめぐる「声」が再現され、聞き手に特定の評価的意味を与える。同様に、語り手がナラティブを語っているとき、聞き手が自分はその語りの時代や場所にいなかったのにもかかわらず、あたかもそこにいたかのように当時のやり取りを「声」で再現することがある。聞き手は、話し手の語りを聞きながら、話し手や語りの中の人物の「声」をいわば先取り的に語ることで、その場で即興的に疑似対話を構築し、その結果、話し手と語りを協同構築する。聞き手のこの行為そのものが、メタレベルでは話し手の語りへの評価を構築する。このように再現された「声」は、特定の感情やイデオロギーを背景にした様々な人の視点を具現する。再現された「声」は、直接的な感想は述べていなくても感情や意見が込められるのである（松木 2008）。

4. 分析した会話データ

本稿で使用したデータは、男性三人の初対面会話である。参加者はいずれも大卒以上の学歴がある院生もしくは社会人である、二十代が主だが、三十代～五十代の参加者も少数含まれる。場面設定としては、招かれたお宅でパーティに参加しているときにホストがキッチンに席を外し、その間、初対面同士で話をすることになったというもので、収録では収録まで互いに会話をしないようにしてもらい、30分の自由会話を行ってもらった。日本語母語話者による日本語会話5本は日本で収録し、英語母語話者による英語会話は、イギリス（ロンドン・マンチェスター・オックスフォード）・アメリカ（オースティン、テキサス）・オーストラリア（シドニー）で5本ずつ収録した。収録した会話を文字起こしし、分析した。それぞれの会話をトピックごとに区切って分析した。三牧（1999：175）の話題の定義、すなわち「会話の中で導入、展開された内容的に結束性を有する事柄の集合体を認定し、その発話の集合体に共通した概念を『話題』とする」を参考にトピックごとに会話を区切った。初対面会話の中でもナラティブは行われており、自分を語るとき、体験談ナラティブが多く見られた。また意見を述べるとき、そのsupporting evidenceとしてナラティブを使用している例もあった。これらのナラティブを分析対象とした。

5. 英語会話に現れるナラティブの評価

5.1. ナラティブの途中に現れる聞き手の評価

5.1.1. 関連ストーリーと「声」の引用ストラテジーによる評価

以下のオーストラリア会話は、Au4が中心となって、オーストラリア社会は平等社会ではなく階級社会であるという彼の主張を裏付けるような体験談を語っている。聞き手であるAu7やAu6は、関連ストーリーを語り、「声」の引用ストラテジーを使うことでナラティブに関与し、同時にナラティブの評価を行っている。

(1) [AU43]

01 Au4： I think what's striking about Sydney
02 when I first moved here is the fact
03 that whenever you meet someone
04 at university for the first time,
05 they always ask you which high
06 school you went to.
07 Au7： Yeah.
08 Au4： And they attach a great deal of
09 importance to the high school that
10 you went to.
11 Au7： I think it's actually pretty good being
12 from out of town for that reason
（関連ストーリー）
13 Au4： [Right]
14 Au7： [because] I mean I didn't go to like
15 flash high school in Adelaide. It
16 wasn't a terrible one either, but
17 I'm kind of glad that I don't – just
18 I don't have to talk about it.
（関連ストーリー）
19 Au4： Yeah, you don't fit into the hierarchy.
20 Au6： Kings? You didn't go to Kings? @@
（声」の引用ストラテジー）
21 Au4： Yes, yes, yes. @@ I had experiences
22 like that in the first year. I would
23 meet people and I would tell them
24 that I was living in – in the inner
25 west, which is not even the west,
26 but it was still not the east or the
27 north. And immediately after I said
28 that, they would be decidely less
29 interested in talking to me @@@
（中略）
30 Au4： But I think Sydney is quite a divided
31 city in many respects. If you meet
32 people who are going to be lawyers
33 or public servants, they often come
34 from good middle-class families, and
35 they went to private schools or
36 selective schools, very rarely do
37 you meet people in those
38 circumstances who went to classic
39 working class high schools.
40 Au7： I've been to parities and stuff where
41 all the guys have been from like one
42 or two private schools
（関連ストーリー）
43 Au4： Right.
44 Au7： And then, all the women there like
45 and usually they will split off like
46 physically in the parties, there will
47 be like the men's side（AU4：@）
48 of the party and the women's side.
49 And the women will all be from like
50 one of the private schools.
（関連ストーリー）

上記の会話の中で、主たる話し手Au4は、彼の主張であるオーストラリア社会は平等社会ではなく階級社会であるということを実証するために、シドニー大学に入学した当初の自分の体験を語っている。入学当初、誰かに会うと必ずどこの高校出身かと聞かれたこと、そう聞いた人たちは出身高校に大きな重要性を付けていると述べている。

それに対し、Au7が、11-12行目と14～18行目ですぐ自分自身の体験談を「だからシドニー以外の出身だということはいいんだよ」「アデレードで有名高校に行ったわけではない。だからといってひどい高校に行ったわけでもない。そういうことを言わなくてよいことが嬉しい」と関連ストーリーとして述べている。まさにAu4が言っていることを裏付けるように自分の体験を語っている。これは聞き手Au7からのAu4の語りに対する評価である。このAu7の関連ストーリーがまさにAu4の言いたいことだったので、19行目でAu4は、「そう、君たちはヒエラルキーの中に入らないんだ」と述べ、まさにAu7の語りが自分の主張と合致すると認めている。オーストラリア社会は平等社会ではないという自分の主張をヒエラルキーという言葉でより鮮明に表現している。Au4が自分の語りの視点をより明確にしたのである。

次に20行目でもう一人の聞き手であるAu6が「キングス（高校）？キングス高校に行ってないの？」と他人の「声」を使って述べている。この発言は、Au4やAu7が大学入学時に多くの人から尋ねられた質問であり、その他人の「声」をAu6は再現している。Tannen（1989）が言うところの虚構の「声」の再現である。このAu6の「声」の引用ストラテジーの使用は、Au4のナラティブへの評価を行っている。このAu6の「声」はまさにAu4の入学時の体験そのものなので、23-29行で、「自分が内陸部の西の出身であることを告げると皆は自分と話すことに興味を失った」とさらに体験を語っている。この発言はAu6の「声」に触発されたものであると同時に、自分の主張を裏付けるものとなっている。

5.1.2. 異なる視点の提示としての評価

聞き手の評価が話し手のナラティブの修正を要求することがある。以下は、(1) と同じ会話データから取ったものであるが、聞き手が話し手のナラティブへ異なる視点を提示している。

(2) [AU 43]

01 Au4： All my friends from universities like
02 Japanese films and Tom Waits. There
03 is this really clear cultural
04 distinction between working-class
05 Australians and middle-class and
06 upper-middle class Australians.
（話し手のナラティブの視点）
07 Au7： But like do you see that as something
08 that happened after they left high
09 school like something that was sort of
10 cultivated.
11 Au4： No, not at all.
12 Au7： Or was it already=
13 Au4： =I think it starts at very young age.
（話し手のナラティブの視点）
14 Au7： Yeah.
15 Au4： I think that people are often of the
16 impression that the key divisions in
17 Australia are ethnicity or religion or
18 culture. But really the key divisions in
19 my opinion are class and
20 socioeconomic background.
（話し手の主張）
21 Au7： Mmm
22 Au4： It is far more important than those
23 other factors I think
24 Au7： Yeah, I mean, it is, but I think – but
25 ethnicity affects people's employment
26 opportunities. So I think that's true,
27 but like does also restrict because
28 that restricts mobility and I don't
29 think you can really separate that
30 from class in a sense
（話し手の意見に反論・異なる視点の提示）
31 Au4： Right.

上記の会話では、オーストラリア社会の中の階級差が話題となっている。Au4は、この会話の

直前に、高校時代の友人でそのまま地元に残った友人たちの映画や本の趣味と、自分が現在接しているシドニー大学の友人たちの映画や本の趣味が全然違うことを述べている。その後、02〜06行でワーキングクラスのオーストラリア人と中流もしくは中流の上のオーストラリア人との間には、明白な文化的な違いがあると主張している。それに対し、聞き手であるAu7は、07〜10行でその違いは高校を卒業してからできたものだと思うかと尋ねている。するとAu4は、13行目でこの違いは子供の時から始まっていると述べ、15〜20行でオーストラリア社会を分けているのは民族性、宗教、文化だと思っている人も多いが、本当に分けているのは階級と社会経済的背景であると主張している。これに対してAu7は、同意しながらも24〜30行で、民族性が就職の機会に影響を与えていることを指摘し、Au4の言うことも当たっているかもしれないが、民族性が社会的流動性を制限しているので、民族性と階級を分けて考えることはできないのではと述べている。これに対し、Au4も同意している。この会話では、オーストラリア社会の階級差についての意見をAu4が述べ、それに対し、Au7もただ同調するのではなく、自分の意見も述べることで、Au4のナラティブへの評価を示し、ナラティブの内容修正を要求している。

5.2. ナラティブの終結部に見られる聞き手の評価

5.2.1. second storyによる聞き手の評価

話し手のナラティブが終わったところで、聞き手が話し手となってsecond storyを語ることでナラティブへの評価を行うことがある。以下の会話は、テキサスで収集した英語会話であるが、経済的理由で大学院に進めず今は働いていると語っているU2は、自分のナラティブの終わりに「自分の仕事には価値がある」という自分の人生への姿勢を述べている。いわば、話し手自身が自分のナラティブへの評価を行っている。U2がナラティブを語る間は、笑い以外は黙って聞いていたU3がこの後、自分自身も関連したsecond storyを語ることで、U2の語りに自分は触発されたことを示している。以下はfirst storyとも言えるU2のナラティブである。

(3) [US31] U2によるナラティブ

01 U2： Or people who have gone through the
02 equivalent programs at like the NSA
03 or something like that. It's a really
04 –I mean it's a very (・) it's – it's built
05 on academics, and it doesn't – and
06 it makes sense in some ways. So you
07 know I get out. I don't really want to
08 go to grad school. I don't have enough
09 money to pay my way through
10 at the moment. And I don't want
11 to trust to a stipend
12 U3： Yeah.
13 U2： And so I decided to you know get
14 some work under my belt. And then
15 the only thing available for people
16 who don't want to commit to like
17 a 10-year contract or something
18 like that is web development.
19 U1： Yeah.
20 U2： So now I am working for libertarians.
21 Like I just got this job kind of
22 randomly through a friend's
23 connection.
24 U1： It's usual, I guess.
25 U2： Yeah, and just kind of email this
26 guy and email back they needed
27 somebody like that week to start.
28 So I'm working for a libertarian
29 political action group, uh making
30 websites aimed at the upcoming
31 election, (U-hn) which is so completely
32 in deviation from [my political space],

（U3：@@@）
33 U2：　Really it's kind of interesting.
34 U1：　It's funny what you compromise to
35　　get a paycheck.
36 U2：　Well, it's, like I thought about it, and it
37　　was like is this compromise, am I
38　　selling out yet.　I don't think I am
39　　selling out, because I, honestly, I want
40　　everybody to get their message out,
　　（話し手自身のナラティブの評価）
41 U1：　Yeah.

上記の会話で、U2は07〜11行目で、大学を出たが今は大学院に進もうとは思っていないこと、大学院に進む経済的余裕がないこと、奨学金に頼るつもりはないことなど語っている。続いて13〜18行、20〜23行と25〜32行目で、U2は自分ができる仕事を探したこと、現在は友人のつてでlibertariansの政治的活動グループのための選挙用websiteを作っていること、このグループの政治的信条は自分の信条とは全く異なることなどを語っている。これに対し、聞き手の一人であるU1は34〜35行目で、給料のために妥協したのかと揶揄ともとれる発言をしている。するとU2は、36〜40行目で、自分を売っているのではない、この政治的活動グループのメッセージがすべての人に届けばよいと思っていると応戦している。たとえ自分の信条とは全く異なることであっても、情報として皆に発信する手伝いをしている自分の仕事には価値があるのだと明言している。大学院に行く経済的余裕がない自分ではなく、経済的に自立した自分、自分の職業に誇りを持ち社会的貢献をしている自分を提示している。自分自身の体験談ナラティブをお金がないから大学院に行けず働いているという話ではなく、自立し世の中に役に立つ仕事をしているというpositiveなselfの提示を行い、自分のナラティブにプラスの解釈を加えている。

以下は、このU2のナラティブに関連して聞き手であったU3が話し手となって行ったsecond storyである。

（4）[US31]　U3によるsecond story（聞き手からの評価）
01 U2：　What do you do in political science?
02 U3：　I study the Supreme Court.
03 U2：　Okay.
04 U3：　Yeah.　But I don't want to become a
05　　lawyer, that's, that's usually the first
06　　question that I get.
07 U2：　Uh.
08 U3：　I'd rather just go and teach under-
09　　grads about political science and the
10　　court.
11 U1：　Uha..
12 U3：　Ah because if I went to law school, it'
13　　d be like a $100,000 in debt. And at
14　　least this way I am getting a TAship,
（U2：　@）
15 U3：　So I'm not, I am living poor, you
16　　know, I've got very small salary but
17　　at least I don't have any loans.

上記の会話で、U3は、02行、04〜06行で、自分の専攻が最高裁判所であること、政治学をやっているからといって弁護士になるつもりはないことを明かしている。08〜10行では、将来は政治学や裁判所について学部生に教えるようになりたいのだとも言っている。U2のstoryに触発されて自分のstory（second story）を語っているのである。12〜14行目及び15〜17行目で、弁護士になるために法科大学院（law school）に行けば、十万ドルの借金を背負うことになるが、今のままなら少なくともTAとして奨学金が得られると述べている。この奨学金で貧乏だが、少なくともローンを組まなくてすんでいると答えている。この会話の後、U3は法科大学院に行く経済的余裕がないが、経済的に自立し、好きな研究を

している自分に満足しているとも語っている。この一連のU3によるナラティブは、この前にU2が語ったstory、すなわち大学院に進む余裕がないので仕事についていること、その仕事に誇りを持っていることなどのstoryに触発されて語られたsecond storyである。U3がU2の語りを聞いて心を動かされたからこそ出てきたstoryであり、このstoryを語ることでU2の語りへの共感を示している。話し手が語るstoryへの共感は、あいづちやうなずき、コメント、質問などでも表すことができるが、この例のように関連するsecond storyを語ることによっても可能なのである。U3がsecond storyを語ることで、U2のナラティブへの肯定的な評価を表している。

6. 日本語会話に現れるナラティブの評価

6.1. ナラティブの協同構築の過程で見られる聞き手の関与と評価

日本語会話では、聞き手はあいづち・笑いなどで聞き手に徹することが多く、話し手のナラティブに対する評価を語りの途中で入れることは少なかった。ナラティブへの評価は、話し手のナラティブが終わった段階で、評価コメントを述べるか、second storyとして聞き手自身の体験を語ることで間接的に評価を行うことが多かった。

以下は、話し手のナラティブの途中で聞き手が評価を表している例である。

(5) [JP69]

01 J43： 特に、T大の中でも特に、情報系の人
02 達って、あのー、人としゃべんないん
03 ですよ。
04 J34： ［ああー。］
05 J35： ［あ、そう］なんですか↑うん。
06 J43： 人としゃべんないし、何だろうな↑あ
07 の、ほっんとに、パソコンだけが友達
08 みたいなやつが［聞き取り不能］
（J35・J34：［@@］）
09 J43： っていうのを大学入って見て、<前歯
10 のすき間から息を吸い込む音>間違え
11 たかなあーとか思って。
（話し手の心の「声」の引用）
（一同：@@）
12 J35： 若干思ってたのと違ったみたいな。
@@ （聞き手からの「声」の引用）
13 J34： ちょっとおかしかった。@@
（聞き手からの「声」の引用）
14 J43： 噂には聞いてたけど、こんな人ほんと
15 にいるんだみたいな人がけっこう［い
16 てー、］
（話し手の心の「声」の引用）
17 J35： ［あー。］
18 J34： へえー↑
19 J43： 最近はでもわりと、あ、おもしろい人
20 だなあぐらいに思うようになったです
21 けど。
22 J34： あー。
23 J43： や、入ったときはもう衝撃で、
（話し手の評価）
（J35：@@）
24 J43： こいつ何しゃべりかけたら俺に話しか
25 けてくれんだろう、［みたいな。@@］
＝ （話し手の心の「声」の引用）
（J34：＝［@@］）
26 J35： それでけっこう始めー、その、なんか
27 学科というか、そん中の間ではー、友
28 達が、作りにくいかった感じですか↑＝
29 J43： ＝作りに、やっぱ、作りにくくて、
30 できた友達もー、
31 J35： うん。
32 J43： なんだ、5、6人で、最初に、固まって
33 たんですけど［やっぱ］みんな、
34 J35： ［は［い。］
35 J34： ［おー、おー、］
36 J43： がーがー、がーがー、うるさい、やつ
37 らで、＝
38 J35： ＝うーん。

39 J43：　だから授業中後ろで俺ばーって、しゃ
40　　べって、
（J35・J34：@@）
41 J43：　おい、とか言われてたんですけどー、
42　　（・）なんかほんとに、さい、初めて
43　　最初、＝
（当時の第三者の「声」の引用）
44 J35：　＝うん。
45 J43：　隣に席になったやつは、もうほんとに
46　　パソコンと友達みたいな人で。＝
47 J35：　＝もうちょっと、＝
48 J34：　＝ああ。
49 J35：　パソコンとしゃべってるから話しかけ
50　　ないって@@［話ですか↑］
（聞き手からの「声」の引用）
51 J43：　［ほんと、そう］それで、ちょっとあ
52　　の普通の、話、メシ、何［食べる↑］
53　　みたいなこと言っても、
（話し手の当時の「声」の引用）
54 J35：　［ああ。］
55 J43：　うん、メシ、あ、いい、行かない、
56　　［みたいな］（聞き取り不能）で、
（当時の第三者の「声」の引用）
（J34：［@@］）
57 J43：　で、
58 J34：　パソコン↑
59 J43：　パソコンで。で、プログラムの［話と
60　　かを、］
61 J35：　［うん、うん。］
62 J43：　これ分かんないんだ、けどって聞くと、
63　　もうものすごいニコニコして（聞き取
64　　り不能）
（話し手の当時の「声」の引用）
（J35・J34：@@）

上記の日本語会話では、話し手であるJ43が、理工系の大学に入学した時、まわりの同級生に、いわゆる「パソコンおたく」が多く、お昼に誘っても断られたが、プログラムのことを聞くとニコニコして応対してくれたことなどを語っている。J43はこの体験談を「衝撃的だった」という言葉で、ショックな出来事として、自分のナラティブの評価を行いながら語っている。またJ43は、ナラティブの過程の10-11行、14-15行、24〜25行、62行で当時の自分の「声」や心の「声」を再現している。また41行と55行では当時の第三者の「声」を再現している。これらの「声」の引用によって、過去の出来事、すなわちJ43の入学時の戸惑いをめぐる「声」の再現がなされることにより、J43のナラティブに特定の評価的意味を与えている。

このナラティブの途中12行目で聞き手の一人であるJ35が「若干思ってたのと違ったみたいな」と言って入学当時のJ43の気持ち、すなわち心の「声」を先取りして言っている。するとすぐ直後13行目でもう一人の聞き手であるJ34が「ちょっとおかしかった」とこれも入学当時のJ43の気持ち、すなわち心の「声」を先取りして言っている。聞き手二人が、当時のJ43の「声」を先取り的に語ることで、その場で即興的に疑似対話を構築し、話し手J43と協同でナラティブを構築している。また聞き手のこの行為そのものが、メタレベルで話し手の語りに評価を与えている。

6.2. ナラティブの終結部に見られる聞き手の評価

6.2.1. second storyによる聞き手の評価

上記のJ43の話をあいづちや質問をしながら聞いていた美大生J35が、美大生のコミュニケーションの特徴をsecond storyとして語っている。

（6）[JP69]　聞き手によるsecond story
01 J35：　全然。あでも美大生とかいうと逆にほ
02　　んとに変な人多いですよ、普通に。
03 J43：　［へえ。］
04 J35：　［たぶん］言ったら。
05 J34：　アーティスティックな↑
06 J35：　いや、アーティスティック、っていう
07　　ふうにたぶん、美大入った時点で、ま、

08　　そういう人ばっかりじゃないんですけ
09　　ど、なんか、選民思想じゃないけど選
10　　ばれた感が、どっかに入ってきている
11　　んですよ。
12 J34：［あー。］
13 J43：［へー。］
14 J35：俺はだから、その、センスがあるか
15　　らってそれこそ、［思ってる］やつが
16　　いるし、
17 J43：［あー、はいはい。］
18 J35：ま、実際ある人もいるんですけど。あ
19　　と、それこそ、けっこう打ち込みやす
20　　い、っていう［こうなり］やすいやつ
21　　がやっぱいて、
22 J43：［あー。］
23 J35：ほんとにー、（・）なんて言うんだ
24　　ろ↑（・）わりとその文系とか、それ
25　　こそコミュニケーションとかいって、
26　　こういうふうな感じで会議とか、
27 J34：うん。
28 J35：したりする、ことが多いと思うんです
29　　けど、美大、とかも、会議をするとー、
30　　会議とかそういう打ち合わせとかする
31　　とー、みんな、我が強いというか、
32 J34：［あー、あー］
33 J43：［あー。］
34 J35：こうやりたい、とかいうのが、しっか
35　　りしてる、者が多かったりとかして、
36　　意見のすりあわせというよりは、意見
37　　のぶつけ合いみたいな@@話なん［で
38　　すよ。］
39 J43：［あー。］
（J34：［@@］）
40 J35：わりと。だから僕はこれがいいと思う
41　　んだ、で、私はこれがいいと思う。
42 J34：うん。
43 J35：じゃあ、お互いのいいところをピック
44　　アップして、なんか新しいもん作ろう
45　　よ、に、いくことが、多くなかったり
46　　とかして、＝
47 J34：＝おー。＝
48 J43：＝［あー。］
49 J35：［じゃあ、］どっちがいいか決めようぜ、
50　　みたいな。@@
51 J43：［あー2。］
（J34：［@@2］）
52 J35：そんな感じなったりとかして。
53 J43：そういうのってやっぱあれですか、お
54　　前のはここがダメだからあり得ない、
55　　みたいな感じに［なるん］ですか↑
56 J35：［うん。］そうですよ、だから。そうい
57　　う感じなりますね。だから僕は、だか
58　　らこれについてこういうのありなんだ
59　　けどどう↑って言ったら、相手の悪い
60　　とこのけなし合いなんか始まって。＝
（J43・J34：＝@@）
61 J35：いやーでもそれやったら、こういう人
62　　のこと考えてないと思う、みたいな。
63　　やでもお前がやってるのだってこうい
64　　う人のこと考えてなくないって水掛け
65　　論みたいの始まっちゃって。

上記会話では、J43の話を引き継いで、聞き手の一人であったJ35が、美大生は一人一人が自分のセンスに自信を持ち、我が強く、皆で話し合ってもなかなか意見がまとまらない大変さを話している。コミュニケーションに関する専攻別の学生気質が話題になっており、理工系院生J43の話に触発されて美大生J35が、second storyとして自分の体験を語っている。J35は、J43が話している間もあいづちや質問などで聞き手としてふるまっていたが、自分もsecond storyを語ることで、J43の話への共感を示し、J43の語りへの評価を表している。

6.2.2. 評価コメントによる聞き手の評価

今回分析した5本の日本語会話の中には意見を述べると言う箇所はほとんど見られなかった。唯一

の例外が、以下の日本語会話（7）の箇所である。J38の語りの最後に聞き手が評価コメントを行っている。

（7）[JP72]

01 J38：　だからまあ、個人的にはですよ、あの、
02　最終的な到達点はある程度やっぱり、
03　描いて［おく必要ってのは1］やっぱ
04　りある、
05 J43：　［うんうん。うん。1］　（あいづち）
06 J38：　基礎研究だからいいっていう［ことで
07　はなくて、2］
08 J43：　［はいはいはい。2］　（あいづち）
09 J38：　基礎研究はこれがたか、もしできたら、
10　例えばこんなこともできる、＝
11 J43：　＝はいはい［はいはい。1］（あいづち）
12 J38：　［んじゃないか1］っていうところまで、
13 J33：　うん。＝　（あいづち）
14 J38：　＝考えてやっぱり研究する必要ってい
15　うのは［やっぱり文系でも1］僕はあ
16　ると、
17 J43：　［うんうん1。］　（あいづち）
18 J38：　［思う2］んですね。
19 J33：　［うん。2］　（あいづち）
20 J38：　だから僕がさっき、偉そうなこと言い
21　ましたけど、それを、実際に、それを
22　最終的な到達点として、あの、社会の
23　認識を、少しでも［変えたいと、1］
24 J43：　［はいはいはい。1］＝　（あいづち）
25 J33：　＝うん。＝　（あいづち）
26 J38：　＝いうふうに思ってる、それを動機付
27　けてんのやっぱり友達がそういうので
28　苦しんでるし、自分もやっぱ苦しい思
29　いをしたりするので、え、それが少し
30　でも変れば。それが絶対だとは思わな
31　いですけどね。
32 J33：　うん。　（あいづち）
33 J38：　だけど、実際に自分が扱えるデー
34　ターっていうのは非常に限られた［も
35　のですし、1］
36 J43：　［ああ、はい。1］＝　（あいづち）
37 J33：　＝［うん。2］　（あいづち）
38 J38：　［そういう2］意味では基礎研究しかで
39　きない。
40 J43：　［うんうん。3］　（あいづち）
41 J33：　［うん。3］　（あいづち）
42 J38：　［ただ、3］最終的な到達点は描いてま
43　す。
44 J43：　ふーん、なるほど
（聞き手による評価コメント）

上記会話では、話し手J38が自分の研究の目的は社会の病気に対する認識を少しでも変えたいことだと述べ、基礎研究と思われる自分のような研究においても、最終的な到達点を考えて行うべきだと意見を述べている。この際に、社会の病気に対する間違った認識のために苦しんでいる友達がいるし、自分も苦しい思いをしたと体験談を語り、自分の意見のサポートとして体験談ナラティブを使っている。42-43行目で、話し手J38は、「最終的な到達点は描いています」と言って、文系の研究者として文系の基礎研究の意義を語った自分のナラティブへの評価を与えている。このナラティブが語られる間、聞き手であるJ33とJ43はあいづちを打ち、J38のナラティブを促しているが、あいづち以外は一切何も言っていない。J38の語りが終わった44行目で、聞き手の一人であるJ43が「なるほど」と短く言っているが、これがJ38のナラティブに対する評価コメントとなっている。

7. まとめ

日本語会話でも英語会話でも聞き手は、あいづち、笑いなどで聞き手として話し手のナラティブへ関心を示し、話し手のナラティブを促している。あいづちや笑いは、話し手の語りに対するポジティブな評価を与えていると言えるだろう。本稿

の分析では、日本語会話と英語会話の聞き手はともに、あいづちや笑いに加えて、様々な形で話し手のナラティブへの評価を表している。そしてその表し方は、日本語会話と英語会話では異なる様相も示した。この違いはどこからくるのだろうか。

本稿と同じ初対面会話データを分析し、談話展開スタイルの日英語対照研究を行った大谷（2015）は、話題展開に特徴的なスタイルとして、interactive style, duet style, monologue styleの三つを挙げている。英語会話に多いinteractive styleとは、進行中の話題について聞き手が話し手に何らかの情報を求める発話をし、話し手がそれに答えて情報提供を行うことで話題が深まり進行していくスタイルである。上述のオーストラリア会話（1）（2）などがそうで、主な話し手Au4のナラティブに他の二人がナラティブを促す関与をいろいろと行っている。関連ストーリーを語り、「声」の引用ストラテジーを使用し、Au4のナラティブを共に構築し、ナラティブを発展させている。このような会話では、聞き手の評価は、ナラティブの途中でどんどん行われる。聞き手はナラティブの評価を行いながらナラティブの発展に参加していくのである。また聞き手は、話し手のナラティブに反論する形で、違う視点の提示を行い、ナラティブの修正を要求することもある。

一方、大谷は日本語会話の特徴は、monologue styleが多いことであると述べている。このスタイルでは、一つの話題の中で、一人が「話し手」となって話し続ける。たとえば、前述の日本語会話（7）では、話し手が意見を語る間、聞き手は聞き役に徹し、聞き終わったところで短い評価コメントを述べている。オーストラリア会話（2）に見られるような話し手の語りに反論し、違う視点を提示するようなことは見られない。そもそも日本語会話では話し手が意見を語ることはほとんど見られず、ナラティブは体験談ナラティブが主だった。monologue styleでは、聞き手はあいづち・笑いなどで聞き手に徹することが多く、話し手のナラティブに対する評価を語りの途中で入れることは少ない。ナラティブへの評価は、話し手のナラティブが終わった段階で、評価コメントを述べるか、second storyとして聞き手自身の体験を語ることで間接的に評価を行う。日本語会話でもinteractive styleを取るときもあり、それは（5）のように、話し手が体験談ナラティブを語るときである。その場合は、聞き手が「声」の引用ストラテジーを使って、ナラティブの語りの途中で評価を入れ、ナラティブを話し手とともに構築している。

謝辞

本研究は科研費基盤研究（c）「日・英語の話題展開の手法：円滑な英会話のための社会言語能力の育成に向けて」（研究代表者　大谷麻美）の助成によって行われた。ここに記して謝辞を表する。

会話の文字化に用いた記号

[　　会話の重複のはじめを示す。
]　　会話の重複の終わりを示す。（[　]内の数字はどの発話同士が重なるかを示す。）
［聞き取り不能］聞き取り不可能だった箇所。
@　　笑を示す。@の数が笑いの程度を示す。
＝　　二つの会話が途切れなく密着していることを示す。
（・）　一秒未満のポーズを示す。
↑　　会話の上昇イントネーションを示す。

参考文献

De Fina, A. & Georgakopoulou, A. (2012) *Analyzing Narrative*. Cambridge: Cambridge University Press.

Duranti, A. (1986). The Audience as Co-author: An Introduction. *Text*, 6(3), 239–248.

Georgakopoulou, A. (1998). Conversational stories as performances: the case of Greek. *Narrative Inguiry* 8(2):319–350.

Goodwin, C. (1979). The interactional construction of a sentence in natural conversation. In G. Psanthas

(ed.) *Everyday language: Studies in ethnomethodology*. New York: Irvington Press. 97-121.

Goodwin, C. (1984). Notes on story struetone and the organization of participation. In M. Atkinson & J. Heritage(eds.) *Structures of social action*. Cambridg: Cambridg University Press. 225-246.

Jefferson, G. (1979). A technique for inviting laughter and is subsequent acceptance/declination. In G. Prathas(ed.) *Everyday language: Studies in ethnomethodology*. New York: Irvington Press. 79-96.

松木啓子（2008）「ナラティブ考―コミュニケーション行為としての語りをめぐって」唐須教光編『開放系言語学への招待―文化・認知・コミュニケーション』慶応義塾大学出版会 103-119.

三牧陽子（1999）「初対面インターアクションにみる情報交換の対称性と非対称性―異学年大学生間の会話の分析―」『日本語の地平線』くろしお出版 363-376.

Labov, W. & Waletzky, J. (1967). Narrative Analysis: Oral Versions of Personal Experience. In J. Helm (ed.) *Essays on the Verbal and Visual Arts*. Seattle: University of Washington Press.

Lerner, G. (1992). Assisted storytelling: developing shared knowledge as a practical matter. *Qualitative Sociology* 15(3): 247-271.

Mandelbaum, J. (1987). Couples sharing stories. *Communication Quarterly* 35 (4): 144-170.

Manzoni, C. (2005). The use of interjections in Italian conversation. In U.M. Quasthoff & T. Becker (Eds.) *Narrative interaction*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins 197-220.

Mulholland, J. (1996). A series of story turns: intertextuality and collegiality. *Text* 16 (4): 535-555.

Ochs, E. & Capps, L. (2001). *Living Narrative: Creating Lives in Everyday Storytelling*. Cambridge: Harvard University Press.

大谷麻美（2015）「話題展開スタイルの日・英対照分析―会話参加者はどのように話題の展開に貢献するのか」津田早苗・村田泰美・大谷麻美・岩田祐子・重光由加・大塚容子『日・英語談話スタイルの対照研究』ひつじ書房 193-229.

Sacks, H. (1973). On Some Puns with Some Intimations. In R.W. Shuy (ed.) *Sociolinguistics: Current Trends and Pospects*. 23rd Annual Round Table Monograph Series on Languages and Linguistics. Washington, D.C.: Georgetown University Press. 135-144.

Sacks, H. (1974) An Analysis of the Course of a Joke's Telling in Conversation. In Bauman, R. & Sherzer, J. F. (Eds.) *Explorations in the Ethnography of Speaking*. Cambridge: Cambridge University Press. 357-353.

田中妙子（1998）. 会話における＜先取り＞について 早稲田大学日本語研究教育センター紀要 10, 17-40.

Tannen, D. (1989). *Talking voices: Repetition, Dialogue, and Imagery in Conversational Discourse*. New York: Cambridge University Press.